

2014 6/10

No.1972

毎月第2・第4火曜日発行

政経 かながわ

一般社団法人
— 神奈川政経懇話会 —



小田原フラワーガーデン(小田原市久野)で、世界最大級のネギ坊主「アリウム・グローブマスター」が見ごろを迎えている。1500～2千程度の小さな花が球状に集まったもので、大きなものは直径20センチ以上。6月上旬まで見ごろという。



contents

視点・点描	3
あらためて思う里山の富	
国際	4
日中首脳会談の早期実現を 四つの共同声明・宣言を順守	
経済	6
東京で「第3次ホテル戦争」 五輪にらみ外資参入相次ぐ	
企業最前線	8
拡大するスマートメーター メーカー各社、世界市場にらむ	
くらし2014	10
インフル薬の効果に疑問	
広告珍談	12
～新聞広告が始まった⑪ 取次ぎします	
NNAアジア経済レポート	13
会員のページ	14
2013年度事業報告（案）	
会員のページ	15
2013年度事業報告（案） 事務局からのお知らせ	

事務局だより

◇横浜定例講演会

2014年7月14日（月）

13時30分～15時

横浜ベイシェラトンホテル&
 Towers 5階「日輪」

講師は弁護士、元内閣法制局
長官の 阪田 雅裕 氏
演題は「政府の憲法解釈と集
团的自衛権（仮題）」

◇横浜定例講演会

2014年8月7日（木）

13時30分～15時

崎陽軒本店 5階「マンダリン」

講師は元東京経済大学教授、
神奈川県地震災害対策検証委
員会座長の 吉井 博明 氏
演題は「神奈川県の地震危険
と備え（仮題）」

視点 点描



あらためて思う里山の富

多くの人たちは、山の恩恵と切り離された生活を営んできた。だから、ていねいに話さないと分

かってもらえない。わたしは首都圏出身ながら、田んぼの水路でドジョウと戯れ、野ウサギを捕まえてカレーにしたこともある。いま、そんな記憶はなくなりつつある。

『里山資本主義』（角川oneテーマ21）という新書が話題になった。見捨てられ、耕作放棄された里山に、お金に換算できない価値を見いだす。著者で日本総研主席研究員の藻谷浩介さんの文章を、「そうなんだよな」と相づちを打ちながら読み進んだ。

「里山の豊かさ」の事例を読むうちに、足元の神奈川にも同じような現場があることに気づいた。丹沢のふもとにある秦野市名古木なごきという地域である。NPO法人「自然塾丹沢ドロン会」が12年前から、

耕作放棄された棚田を再生し米作りを続けている。

再生した棚田は水生生物の宝庫になった。東海大学研究室の調査によると、ホトケドジョウ、アカハライモリ、タイコウチなどが確認された。へびも、イノシシも、シカも出る里山が戻った。

人の笑顔も戻ってきた。キヌヒカリなど米の収穫はもちろん、自然と戯れる楽しさ、仲間と汗を流す充実感など多くの「収穫」がある。再生の様子は『丹沢山麓里山・田んぼ物語』（夢工房）に詳しくまとめられている。

「豊かさとは何か」という問いかけは、高度成長のさなかから数十年は続いている。これまでの経済指標に表れにくい価値を、里山の現場で探してみよう。

（神奈川新聞社編集局次長

小野 明男）

「山の日」ができる。2016年から、8月11日は国民の祝日となる。超党派議員連盟の法案が可決、成立した。山の恩恵に感謝するのが趣旨である。山の豊かさとともに生きてきた歴史からみれば、あって当然の祝日だろう。便利な都会暮らしでつい忘れがち

なことには驚いた。20代の若者は幼いころ、そこで遊んだ体験がなかった。「人里近くにあつて人々の生活と結びついた山」（広辞苑）と説明が必要なのだ。

な、その恩恵を思い起こしたい。最近、当たり前のように使っていた「里山」という言葉が通じな

る。人が手を加え続けないと荒れる。そんな補足説明もする。

取次ぎします

新聞の歴史は1609年（江戸時代の7年目）、ドイツのレラツィオン、22年、イギリスのウィークリー・ニュース、31年、フランスのガゼット、1703年、ロシアのベドモステイが、いずれも週刊紙として創刊（日刊紙は18世紀）された。

となると広告をあつかう、代理店の誕生はいつか。その起源も古く1612年、フランスで新聞を発行するT・ルノードが、パリで《金の雄鶏社》を創業したとか。あれ、《ガゼット》が発刊される前になるが、どうしてなの？（そのモノの本に書かれている！）

日本の新聞は1862（文久2）年、官板バタビア新聞が最初（1962号をどうぞ）。70（明治3）年、初めての日刊紙、横浜毎日新

聞が創刊。その翌年、発刊され

た。新聞雑誌という新聞が、《新聞大意》という本を出版した。ヨーロッパの新聞情勢を報じるとともに、広告代理店についてこう書いている。

「広告の世

話人といふものあり。これは広告を集めて新聞紙に載せ、少しづつ口銭を取るなり。たとへば直に新聞紙屋へ持ち行くときは、三シリングを払ふべきものなるを、世



話人に頼むときは三シリング六ペンスを払ひ、そのうち六ペンスは世話人の口銭となるがごとし。およそ世話人に頼むときは、口銭だけ損をすれども、その代りに大いに労をはぶくなり。またゼ・タイムスのほかは、大抵いずれの新聞において

紙屋に世話人といふものをつかひ、これを商人などへ行かしめて、広告を集むるなり」

この世話人こそ、広告代理店である。その本は新聞業界で広く読まれたという。まさに新聞広告の啓蒙書であった。やった！効果あった。翌年の1874（明治7）年、

銀座に《内外用達会社》が開業した。日本最初の代理店である。さらに10年後、福沢諭吉や渋沢栄一の支援をうけて《弘報堂》が開業。その頃、操業していた《空気堂》が「十年を経過す、実に我国新聞広告取扱営業の開祖なり」と、新聞に広告をだした。

87（明治20）年、《全国広告取扱所》が創業。手数料は1割、初年度から月額50円もの利益があったという。95（明治28）年、東京に《博報堂》。大阪に《万年社》などが開業。のちに電通になる「日本広告社」と「電報通信社」は1901（明治34）年、に創業した。07（明治40）年、両社は合併。《日本電報通信社》になった。図はその頃の広告。題字のまわりは電報そのもの。

（美術エッセイスト、茅ヶ崎市在住）
 図「日本電報通信社」の新聞広告・1907（明治40）年ころ掲